

日本泌尿器科学会関西地方会10年間の総括

京都大学医学部泌尿器科学教室（主任：加藤篤二教授）

友 吉 唯 夫

TEN YEARS OF THE KANSAI DISTRICT UROLOGICAL
ASSOCIATION OF JAPAN

Tadao TOMOYOSHI

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University**(Chairman: Prof. T. Katō, M. D.)*

During past ten years, almost one thousand presentations were made in the Kansai District Urological Meeting. The presentations consisted mostly of case reports, more than half of which being on tumor or anomalies. The present-day problems involved in our association were also discussed.

はじめに

日本泌尿器科学会関西地方会は1958（昭33）年9月20日京都にて第1回の開催が、あっていらい年平均5回の集会を10年余にわたりおこなってきた。ところが第52回（1969年5月31日）地方会の席上で、関西地方会の体質を鋭く追求する発言があり、それは現在の学会のあり方に対する若手会員の批判へと発展した。つづいて1969年10月11日、第53回地方会では学術発表はなく、大阪大学園田孝夫教授の司会で「関西地方会のあり方」を主題としてつぎのようなシンポジウム形式の集会がもたれ、出席会員からも活発な意見の交換がおこなわれた。

1. 関西地方会「誕生」の歴史とその背景について
稲田 務（京大名誉教授）
山本 弘（大阪通信病院）
2. 関西地方会のはたしてきた役割（功罪）について
井上彦八郎（大阪府立病院）
結城 清之（大阪市立大）
友吉 唯夫（京大）
3. 関西地方会のはたすべき役割（機能）について
石神 襄次（神戸大）
伊藤 泰二（大阪府立成人病センター）
大川 順正（和歌山医大）
山田 要助（京府立医大）

4. 関西地方会の運営に対する批判および今後の運営方法について
前川 正信（大阪市立大）
宮崎 重（大阪医大）

そのご学会は、上記2, 3, 4の発言者が運営準備委員となって1970（昭和45）年5月23日第54回が開かれた。これは前半を学術大会、後半を学会運営にかんする討議にあて、結局1970年はこれ1回のみとなった。しかしそのご運営委員の選挙があり、1971年からは新しい運営のもとに再出発することとなった。

運営方法もたいせつではあるが、制度変革にもまして精神的な変革、意識変革が重要でなければならぬ。大学紛争が下火になったこんにち、責任を追求される立場にあった人びとの多くはすでに自己への告発をやめたかにみえる。上記の批判集会も関西地方会およびその代表的な担当者に対する本質的な疑義提出が出発点であった。シンポジウムの発言者はそれぞれの立場で誠実にこれに答えようとした。そうでなければ自らの地位は守りえても一般会員から人間として見はなされていたことであろう。学会は解体により再生した。貴重な1年であった。

筆者は与えられたテーマについて述べる準備作業として関西地方会1～50回の全プログラムに目をとおり、考える材料のひとつとした。関西地方会10年間の総括として記録しておきたい。

存在意義について

これは関西地方会というものが存在しなかった時代を比べて考えてみるとつぎのようにいえる。

1. 関西地方会は各地区における皮膚・泌尿器科合同の会合を解散するのを促進した。したがって間接的に泌尿器科独立の気運を助成したといえる。

2. 各地区におけるきわめて閉鎖的な会合を、より広い学問的および人間的交流の場へと発展させることができた。したがって内容もレベルアップした。

少数者の発意と尽力で出発した会ではあったが、こんにちまで多くの会員の支持があったのはそのためである。

指導理念

学会を支えている指導理念は何であったか。何であらねばならぬか。こういうことが今まで疑問にされたり、明確にされたことはない。泌尿器科の独立、学術の交流と親睦というようなことはいわれたと思うが、学会の少数指導層から、指導理念について自己への本質的な問いかけのなされたことはない。

はたした業績・はたさなかった役割

50回にわたる会合において約1,000の発表があり、

これはぼう大な量というべきで出席会員に泌尿器科的知識の面では益するところ大であったといわねばならない。

しかし関西地方会は単なる情報交換の場以上の社会的功績をはたすことはなかった。学会の成果がどのようにして患者に還元できるかという可能性を現行医療制度のなかで追求する姿勢に欠けていたことは指摘されねばならない。泌尿器科医のあり方、研究の現状と批判ということを自己の問題としてとりあげたのは、ようやく第50回地方会においてであった。いうなれば関西地方会には指導理念の欠落とともに社会性の欠如があり、地域内の泌尿器科医の分布ないし交流ということすら討議されたことがなかった。これはもちろんあとで述べる医局講座制支配の問題とも関連してくる。

発表演題

薬物治験報告は数例しかなく、いちおう産学の癒着は希薄であるかにみえる。

臓器別にみると、10回ずつの統計でつねに腎・膀胱・陰囊内容がこの順でベスト3を占めている (Table 1)。陰囊内容が多いのは睾丸腫瘍のためである。

疾患別にみると腫瘍性疾患と奇形がひじょうに多

Table 1 関西地方会演題分類 (臓器別)

臓器	副腎	後腹膜	腎	尿管	膀胱	尿道	陰茎	陰囊内容	前立腺	精囊腺
回										
1—10(1958~1960)	4	6	59	19	33	9	8	26	10	4
11—20(1961~1962)	6	4	69	23	33	21	5	33	11	2
21—30(1963~1964)	10	5	47	21	24	17	9	22	5	2
31—40(1965~1966)	7	7	47	18	23	12	3	17	9	2
41—50(1967~1968)	6	5	51	18	26	13	11	25	4	1
計	33	27	273	99	139	72	36	123	39	11

Table 2 関西地方会演題分類 (疾患別)

回	腫瘍・囊腫	奇形	結石	感染・炎症	外傷・異物・瘻孔	手術	線・断	尿管・異常	腎不全	内分泌・不妊	高血圧・血管障害	統計	外遊談・治験・その他
1 — 10	65	28	22	27	17	8	6	15	4	5	8	3	11
11 — 20	86	42	38	22	13	13	11	8	3	12	6	4	4
21 — 30	70	50	7	12	8	13	7	9	2	12	3	2	5
31 — 40	63	23	20	13	12	12	13	5	5	7	15	0	6
41 — 50	55	23	8	12	21	21	12	10	24	10	4	2	0
計	339	166	95	86	71	67	49	47	38	46	36	11	26

く、全体の半数を占める (Table 2)。このことは「興味ある症例」中心的な出題傾向であり、腫瘍か奇形を出しておけば、いちおう演題になるという雰囲気を感じ

ぜしめる。しかし筆者個人としては地方会は小型総会になるべきではないという意見であり、この傾向をよく批判するものではない。

発表機関

発表機関については80%が大学に関係したものであり、大学中心の学会という傾向を否定できず、その意味では医局講座制を基盤にした発表の場であった(Table 3)。しかし一般病院からの演題提出の比較的小さい原因については、現在の勤務医の置かれている条件をじっくりと考慮しなければならない。

Table 3

回	関西地方会	演題数	提出機関				教授名連記
			大学	一病	般混	院合	
1	— 10	202	155	40	7	19	
11	— 20	223	156	49	17	19	
21	— 30	183	133	32	18	14	
31	— 40	179	137	29	13	22	
41	— 50	209	133	46	31	55	
計		996	714	196	86	129	

開催地について

開催地としては京都・大阪に集中の傾向があるが、交通上の便宜ということもあるにせよ本会発足のいきさつと関係があり、京大・阪大2校のみによる学会運営のあらわれであったといえよう(Table 4)。

Table 4 関西地方会開催地(第1~50回)

大 阪 市	20
京 都 市	18
大 阪 府 下	6
和 歌 山 市	3
神 戸 市	2
奈 良 県	1

会場について

第1回はホテル使用であったが、前半はホテルはそれのみで大学や病院の講堂での会合が大半を占め、産学協同の姿勢は著明でなかった。この間、懇親会はいちども開かれたことはなかったのである。ところが後半になるとホテル使用回数が増加し、大学・病院内講堂の使用は大幅に減少している。これは産学の癒着がしだいに著しくなったことを示す。製薬会社の援助に

Table 5 関西地方会開催場所(第1~50回)

場 所	回		計
	前 半 1~25	後 半 26~50	
大学や病院の講堂	15	7	22
会 館	9	11	20
ホ テ ル	1	7	8

よりおこなわれた懇親会が、主催者から参会者への好意に満ちたサービスと錯覚されるような雰囲気のもとでは、学会のあり方批判の起こりにくい状況があったことも二重の意味で反省されねばならない(Table 5)。

運営について

発会の事情から京大・阪大2校による運営がつついてきた。10年たった現在これは再検討を要する時期にきている。また、稲田・楠両教授のみについて10周年、退官などの行事がおこなわれたことの意味づけもこの点から可能であろう。もちろんこのことの妥当性は別に検討されねばならないであろう。

会費を徴収しながら会計報告もおこなわれず、運営の経理面について会員に知らされたことがない。

会そのものの進行についていうと、討論、批判の機会が自由に与えられていたと思う。しかしそのなかで敬意のみを払われて批判されることがなかった階層の存在したことは否定できない。

医局講座制との関係

たとえば教授名連記という点からみると平均10%前後であり、これは意外に少なく、日泌総会におけるのと大きなちがいである(Table 3)。しかしこのことは演題提出について教授支配がなかったということにはならない。教授の意志が大きく作用して医局講座制の強化と、所属教室のPRの機能をはたしていたことは否定できない。演題提出がそのような形で教室員に課せられるとき、それはすでに真の研究発表としての意義を失ったとみななければならない。やはり関西地方会も大学医局講座制に立脚した学会であったのではないか。そのなかでは発表は講座のものとして評価されてきた。また、教授による発表のなかには医局講座制のもとにおける研究労働の収奪の結果とおもわれるものがあったことも指摘できよう。

学位制度との関係

関西地方会としては学位のための研究発表の場としての機能はきわめて希薄であった。したがって学位制度を積極的に支えてきたということはない。ただ業績中心主義にもとづく副論文作成の場として間接に学位制度を支持してきたと考えられる。

ま と め

以上、関西地方会の過去10年間をふりかえってその功罪を統計的データにもとづいて述べた。

(本論文の要旨は1969年10月11日、第53回関西地方会の席上で発表した。加藤教授のご校閲にたいし感謝する。)
(1970年8月2日受付)